

# 出雲建国の国引き神話とかんなび山

吉 田 薫

## はじめに

出雲国のかんなび山（神聖な山）である仏経山、大船山、朝日山、茶臼山は、宍道湖を取り巻くように位置する。これらかんなび山と山陰の名峰、三瓶山と大山は直線関係にあること（三瓶山 仏経山 朝日山、大山 茶臼山 大船山）を昨年発表した。この直線性は「国引き神話」に由来しているのではないかと、というのが今年のテーマである。

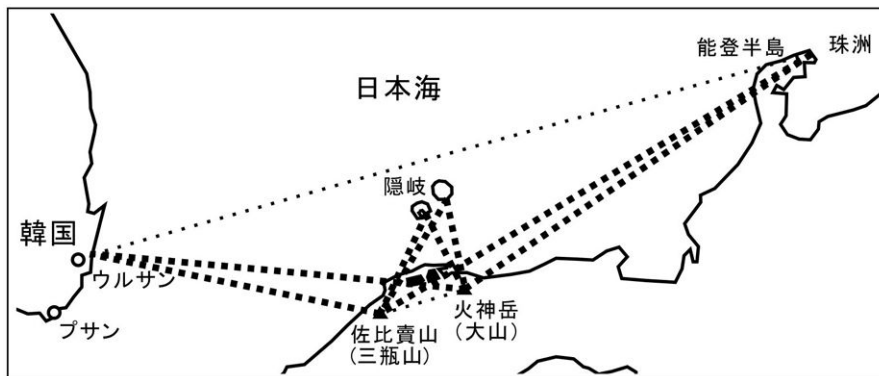


図 1：国引きの範囲（韓国～越）  
三瓶山～大山に平行に珠洲から線を引く新羅に至る



図 2：国引き地図・・・三瓶山～大山 88 km  
（島根県教育庁文化財課HP地図に加筆）

## 検討の方法

国引き神話は出雲国風土記成立（733年）はもとより、邪馬台国の時代や国譲り神話よりも古い話なので、資料が極めて少ない。また、研究も少ない。まず、何に基づきどのような検討をするのか、証明の成否は何により判断するのか、を決めてかからねばならない。

### a) 検討材料と検討方針

次の各材料を吟味しながら用いる。

出雲国風土記

国引き神話が載る書物であり、ここに記載される自然、神社、伝承などについて検討する。ただし、地理・地形、景観の骨格などは変化していないが、伝承の変化や誤写・誤伝が考えられるので、鵜呑みにはしない。

#### 『記紀』の神話

時代背景は日本国の律令制の施行である。『記紀』編纂はその一環の歴史編集であり、国家と編纂者の意図が反映されている。作為のある可能性を常に念頭に置く。誤写・誤伝もある。

#### 神社

- ・位置・・移転していることも多い。また明治期に合祀政策が行われた。

ただし、元の位置からそう離れてはいないはずである。(郡・郷を越えない。)

- ・祭神・・変遷や合祀がある。たとえば、中世の出雲大社の祭神は須佐之男命であった。

したがって、境内社、同名他神社、その他の痕跡等を参考とする。

- ・由緒・神事・・誤伝や『記紀』による潤色もある。他神社との関係を見る。

現在の祭神や由緒に異を唱えることは、神社関係者の不興を買うかもしれないが、避けると論が進まない。

#### 神話・伝説

もとより架空の物語だが、その神の影響力や当時の人たちの考えを知ることができる。

以上から分かるように、推論にはフェイクを含んだ情報やかろうじて残った痕跡を使用せねばならない。傍証となるので、現地での印象を大切に、なるべくシンプルな解釈を行う。

#### b)成否の判断

今まで認識されていなかった地形・地物、神社、伝説など、複数の事柄のつながりが説明できることとする。わずかな断片をつなぎ合わせて想像復元した埴輪像のようなものである。

## 国引き神話

「国引き神話」は、意宇郡の地名由来の説明である。「意宇となづくる故は・・・」で始まり、八束水臣津野命が、国来国来といいながら「志羅紀(韓国)」「北門佐伎(隠岐道前)」「北門良波(隠岐道後)」「高志(越)」の余った土地を四度に分けて「もそろもそろ」と引き寄せて、現在の島根半島を形作ったというもので、引寄せた土地をつないだ加志(船をつなぐ杭)が三瓶山と大山、国を引くのに使った綱が藪の長浜と弓浜半島、そして、国引きを終えて「お糸」という声とともに大地に杖を突き刺したところが「意宇の杜」だとする。

「くにこくにこ」や「もそろもそろ」の繰り返しの詞章に古代の息吹を感じる人は多いだろう。フィクションではあるが、島根半島は4つの山塊に分けられることなど実状を反映しており、現地との照合が可能である。

関和彦氏は早くから目に留めているが、最初の疑問は「なぜ国引きの綱は2本なのか」ということである。

西端の山塊(出雲郡)は三瓶山に結んだ綱(藪の松山)、東端の山塊(島根郡東半)は大山に結んだ綱(夜見島)により固定されている。しかし、西より2番目の山塊(楯縫郡、

秋鹿郡)と西より3番目の山塊(島根郡西半)は固定されていないということである。浮島は留めなければならないと考えた古代人が、間の山塊を楽観的に放置したのだろうか。

ここで気が付くのがかなび山の存在であり、引寄せた山塊を固定する杭と見れば、西より2番目の山塊には大船山(楯縫郡)と朝日山(秋鹿郡)がある。

西より3番目の山塊にはかなび山はないが、その代わり東端の山塊との間に<sup>かたえ</sup>方結郷(片江)、方結浜、玉結浜という地名があり、東端の山塊と堅く結ばれ島根郡の一体化を想像させる。また、方結神社の祭神は<sup>くにあしわけのみこと</sup>国忍別命であり、国を押し分けた神を連想させる。都合のいい解釈かもしれないが、このような地名や神名は他の郡郷にはないことも事実である。

つまり、三瓶山 仏経山 朝日山と大山 茶臼山 大船山の二つのラインは、今の斐川町と松江市辺りの砂洲または砂嘴(当時)を介して島根半島に伸びる二本の綱、かなび山は山塊と綱の途中と打ち込まれた杭(パイル)である。このようにして本土に繋ぎ止められていると解釈できる。

以下、この仮説の検証を行う。

## 要石(かなめいし)

出雲市国富町の<sup>たぶしさん</sup>旅伏山の麓に要石がある。要石大神として八束水臣津野命が祭られている。案内板には「地の動揺せざらん為に此所に石をさし立給へる。即ち此の要石なり。故に村名を国留と書きしを、後に国富と書けり。此の地地震の患なし。」と記されている。要石は六個あり、図らずも前述の六座の山に符合する。

要石といえは、<sup>たけみかづちのみこと</sup>建御雷命を祭る鹿島神宮と<sup>ふつぬしのみこと</sup>経津主命を祭る香取神宮のものが著名である。いずれも出雲国に進駐してきたとされる神である。神話の前後関係ではこの要石が古いので、参考となった可能性がある。

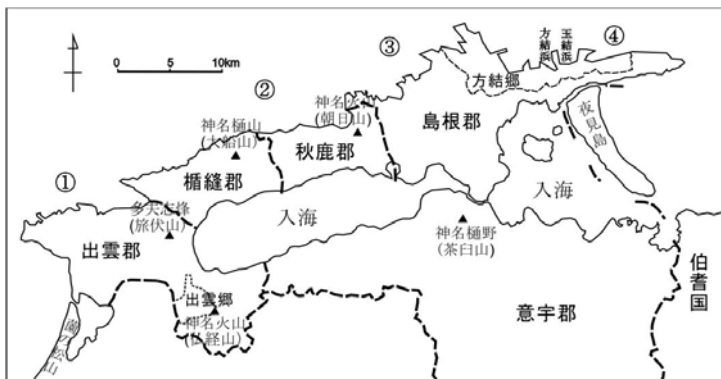


図3：風土記地図  
(元図は加藤義成校注『出雲国風土記』)



写真1：国富の要石

## 「火のライン」と「水のライン」

出雲国風土記においてかなび山は、仏経山と朝日山が神名火山、茶臼山が神名樋野、大船山が神名樋山と表記され、「火」と「樋」の二種類の漢字が用いられている。したがっ

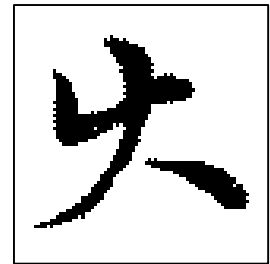


て、三瓶山 仏経山 朝日山は「火のライン」、<sup>2)</sup>「樋」は水を通すトイなので、大山 茶臼山 大船山は「水のライン」ということができる。松浦光江氏は、火の祭、水の祭を想像する。

「火のライン」の三瓶山は3600年前に大噴火し、大山の噴火（2万年前）よりもはるかに新しく、火に結びつく。仏経山と朝日山の共通点は目下のところ不明である。

一方、「水のライン」の茶臼山と大船山には滝があり、また、風土記は大船山の雨乞いについて述べる。したがって、容易に水と結びつく。大山は風土記に「<sup>ひのかみのたけ</sup>火神岳」と載り、一見、水よりも火との関係をうかがわせる。しかし、大山麓の大神山神社や地元のパンフレットは、大山の古名を「大神山」「大神岳」と紹介し、「火神岳」とするのは出雲国風土記の引用時のみである。図に示すように、私は、「火」は「大」の読み間違いではないかと推察する。毎年7月には山頂で水と薬草をとる「もひ(水)とり神事」がある。やはり水に関係する。

図4：「火」の崩し字  
(東京大学史料編纂所・奈良文化財研究所連携検索)  
「火」が「大」と読めるということは、「大」を「火」と読み誤ることもあるはずだ



## 八束水臣津野命

国引きの主宰神、八束水臣津野命の事跡をまとめると次のとおりである。

仏経山山頂より北方を眺め、国引きを決意した。<sup>3)</sup>

仏経山山頂の巨岩には綱が掛けられている。注連縄というより、私には国引きの綱のように見えた。

国引きを行い、引いてきた国を「<sup>狭ぬのわかこく</sup>狭布の稚国」に縫い合わせ、出雲国を形作った。



写真2：仏経山山頂の岩

その時の綱が蕪の長浜（松山）と<sup>よみのしま</sup>夜見島である。

国引きが終り、「お糸」といって杖を立てた。これが意宇の杜である。

この杖は意宇のタブ（タブノキ）といわれる。

「八雲立つ」といって出雲と名付けた。

島根（郡）と名付けた。

国引き後、富神社に鎮座した。<sup>3)</sup>

国引き後、島根半島に要石を打って歩いた。<sup>4)</sup>

旅伏山の麓に要石がある。また、祭神として祭られている。

新羅の国に渡海するとき、<sup>はやつむじわけのみこと</sup>速都武自和気命に順風を祈った。<sup>5)</sup>

<sup>からくに</sup>韓国から帰り旅伏山で休んだ。<sup>5)</sup>

旅伏山の周辺には、韓国へ航海した時の帆が石になった帆<sup>ほむしろいし</sup>筵石（旅伏山）、船が石になった岩船石（出雲市唐川町）、帆が石になった帆柱石（出雲市別所町）がある。<sup>5)</sup> また、足留

の地とされる足駄石が美談神社(出雲市美談町)の石段途中にある。これらに要石を加え、出雲五石(神石)という。<sup>6)</sup>

長浜神社(出雲市西園町)、国村神社(出雲市多伎町)、富神社(出雲市斐川町)、諏訪神社(出雲市別所町)の主祭神である。

旅伏山上の都牟自神社(出雲市国富町)、島根郡の久良弥神社(松江市新庄町)において、速都牟自別命とともに祭られている。

子の赤衾伊努意保須美比古佐和氣命あかぶすまいぬおほすみひこさわけのみことやその妻の天之甕津比賣命あめのみかつひめのみことは、島根半島の各所で祭られている。

要約すると、八束水臣津野命の属性は、国土造成の神、水の神、航海の神(速都武自和氣命と習合していると考え)であり、その事跡は出雲郡、意宇郡、島根半島(楯縫郡、秋鹿郡、島根郡)及びその外郭にあり、国引き神話に関わる地域に分布している。



写真3：多久神社より仏経山を望む  
(出雲市多久町)

## 意宇の杜

八束水臣津野命が国引きを終え、「おゑ」といって杖を突き刺した跡が意宇の杜である。比定地の客の杜(松江市竹矢町)は茶臼山近くの田園の中に位置し、大山が見通せる。また、近くには出雲国庁がある。

客の杜ではタブノキが御神木とされ、その周りに桜や雑木が生えている。国引きのスケール感からすると極めて小さいが、前述の要石と同じく祈禱の場であり、本体に対するリモコンスイッチのような役割と解する。



写真4：意宇の杜と茶臼山

国庁跡に隣接している六所神社の祭神は、伊邪那岐命いざなぎのみこと、伊邪那美命いざなみ、天照皇大神あまてらすおおみかみ、月夜見命つきよみ、須佐之男命すさのおむち、大己貴命おほおみと、『記紀』の登場神が並ぶ。近隣の神魂神社や真名井神社を含めて『記紀』に則っており、意宇郡は中央の統制が行き届いた教条的な地域との感がある。このことはかえって出雲国創生の頃は、今と異なる在来神が祭られていたことを想像させる。

## まとめ

国引き神話とかんなび山の関係は、次の二つに分けることができる。

a) 国引きの主宰神である八束水臣津野命とかんなび山の関係

b)国引きの綱がつながれた三瓶山・大山とかんなび山の関係

a)については、次のとおりである。

国引きで引寄せられた島根半島には八束水臣津野命の事跡が多く残る。

島根半島に大船山と朝日山がある。

八束水臣津野命が名付けた「出雲」の原郷である「出雲郷」には、他地域にも増して多くの事跡が残る。仏経山に登頂し、国引きを決意したと伝わる。

国引きを終えて、杖を差した意宇の杜と指呼の間に茶臼山がある。

b)については、次のとおりである。

三瓶山と仏経山を結ぶ直線を伸長すると朝日山がある。このラインは「火のライン」といえる。

大山と茶臼山を結ぶ線を伸長すると大船山がある。このラインは「水のライン」といえる。

要石の数は六個であり、三瓶山、仏経山、朝日山、大山、茶臼山、大船山の山数と一致する。

綱（砂浜）や要石（まじない）で国を留めようという意思があったのならば、引寄せた土地（山塊）全てを対象としたはずである。

偶然にしてはあまりにも多重的である。ゆえに私は、国引きという一連のストーリーでつながると考えるのである。そして、国引きの原話は、出雲建国の物語としてもっと長々と地形や地物の説明をしていたと推察する。

以上色々述べたが、自らの知識不足や情報不足を否定するものではないので、様々な角度より皆様のご指摘、ご助言を願いたい。

## 付説：派生的課題

検討過程で生じた疑問や推々察について記述する。

## 方結

島根郡の方結神社の祭神は須佐之男命の子の国忍<sup>くにあしわけのみこと</sup>別命とされているが、国を押し分けた意味にとると、国引きとつながる。この神社には、膝餅神事といって、膝で餅をつく祭りが伝わる。立つことのできない狭い船中での餅つきを想像させる。八束水臣津野命の韓国への航海が、誇りとともに祭事として伝えられているのではないか。<sup>8)</sup>

## 大野津神社の雨乞神事

宍道湖北岸の大野津神社（松江市大野町）には雨乞神事が伝わる。大船山他、宍道湖南北の四つの山が交わる地点まで船を漕ぎ出して祝詞を挙げた後で、若者達が神職達に息がとまるほどの水を浴びせかけるといふ。<sup>9)</sup>火と水の関係でいえば、大地のほてりを冷ますという解釈となる。

## タブノキ

タブノキは船材などに用いられ、山陰ではスダジイとともに照葉樹林の高木である。出雲国風土記に産木として「楠」の名がある。クスノキは山陰側ではほとんど自生しないので、タブノキのことだと推察される。

（Wikipediaによると、中国では「楠」はタブノキを指すとする。風土記作成時には樟・

楠の区別があったと思われる。この混同が後世の国字「<sup>たぶ</sup>楠」の作成につながったのだろう。ちなみに樟脳はクスノキからできる。）

小石川植物園 HP は、タブノキの語源について「不詳だが、朝鮮語由来の説がある。丸木船を朝鮮語で ton-bai, tong-bai と言い、これが日本に伝わってトンバイ タブとなり、タブを作る木の意味で タブノキとなった」と載せる。タブノキは、航海と韓国に関係が深い。

旅伏山は、八束水臣津野命が韓国より帰って休んだので名がついた、という伝承がある。旅伏山にもタブノキが多い。両者は語呂が似ており、旅伏山に多いからタブノキ、タブノキが多いから旅伏山、という関係を想像させる。

神社にある大きなタブノキには荒神として藁蛇が巻きつけられていることが多い。<sup>10)</sup>。一方、須佐神社（出雲市佐田町）、須賀神社（雲南市大東町）、真名井神社（松江市山代町）、神魂神社（松江市大庭町）などのご神木にはスギが多い。国つ神系と天つ神系の区別があるのだろうか。

### 八束水（やつかみず）

八束水の解釈は、水の量が多いこと（武田祐吉）、数尺も増水した深い水（加藤義成）、長く大きな水路（水野祐）との説がある。<sup>11)</sup>「八雲立つ」が出雲の枕詞であるように、長いものも見えなくなるほど深いという意味の、「八束見ず」または「八束満つ」の誤記、あるいは語部からの聞き取りミスではないか。

### 出雲の国名

出雲北山には、日本海を渡った北西の風が吹き付ける。湿った風は山地に当たって上昇気流となり、雲が発生する。八束水臣津野命が仏経山に登って国見を行い、雲が湧き上がる景観を見ての感慨とすれば首肯できる。ちなみに、宍道湖の夕日の美しさは、出雲郡上空に懸かる雲によるところが大きい。

国引き神話は本来、意宇郡の項ではなく風土記の巻頭で語られるべき内容である。そうっていないのは、国人と中央の意向を受けた国衛官僚と妥協の産物ではないか。

### 仏経山と茶臼山

仏経山は八束水臣津野命が国引きを決意した山だとすると、バランスとして「おゑ」といって杖を突き刺したのは茶臼山の山頂ではないか。これは土木のプランナーとして感覚である。

前述したように意宇郡の諸神社は『記紀』の影響を強く受けている。中央への服従の過程で、“杖”は茶臼山山頂から今の位置（客の杜）に移転したのではないか。そして茶臼山は、山頂が草地であるからという表向きの理由をつけて、八束水臣津野命を暗喩する神名槌“野”とされたのではないか。

### 大神

『記紀』では須佐之男命及び大国主命が大きく扱われている。私は、須佐之男命は天神かつ国土平定の功、大国主命は国譲りの功により、中央政府に評価されたのだと見る。対して八束水臣津野命は出雲国の創生神であり、日本国統一の面からは評価されない。むしろ出雲国再興の芽を摘むために隠されたのではないか、という疑念をもつ。

出雲国においても、大神として須佐之男命、大国主命との混同があるのではないか。出雲の名称は、須佐之男命の和歌「八雲立つ出雲八重垣妻籠八重垣作るその八重垣を」を起

源とする説もある。また中世には、国引きは須佐之男命が行ったとされたこともある。大国主命は、大己貴命、葦原色許男神、八千矛神、所造天下大神、大國魂大神、大物主命等多くの名を持つ。その中に八束水臣津野命の別称があるのではないか。

三瓶山の佐比売山神社（大田市三瓶町多根）、大山の大神山神社では大国主命が祭られているが、八束水臣津野命との混同があるのではないか。

## 高尾山

藪の長浜と島根半島の接合部と、弓ヶ浜半島と島根半島の接合部に同じように二つの「高尾山」がある。国引き神話と関係があるのだろうか。

## 関連する祭神と神社

一応の見解をもつが、話が細くなるわりには仮説を否定することとはならなかったので省略する。

速都武自和気命

都牟自神社（出雲市斐川町）、筑陽神社（松江市東出雲町）

赤衾伊努意保須美比古佐和気命

伊努神社（出雲市西林木町）

天之甕津比賣命

多久神社（出雲市多久町）、伊努神社（出雲市美野町）、多久神社（松江市鹿島町）

## 引用文献等：

- 1) 武廣強亮平「国引き神話研究史」『出雲古代史研究第1号』1991.5
- 2) 松浦光江「蛇神信仰と八岐大蛇伝説」『荒神谷遺跡の謎のブックレット No.4』H4.12
- 3) 富神社社伝
- 4) 長浜神社社伝
- 5) 『国富郷土誌』H9.2
- 6) 『みだみの里』H3.9
- 7) 武田祐吉「国引の詞の考」『出雲国風土記の研究』1953 他
- 8) 『片江郷土誌』S40.12
- 9) 大野津神社社伝、続大野郷土史 S53.7
- 10) 『伊野郷土誌』H5.3、阿陀加夜神社等にも
- 11) 武廣亮平「国引き神話研究史」『古代出雲研究史第1号』1991.5